宮崎県東諸県郡綾町（ひがしもろかたあやちょう）

豊かな自然の恵みを巧みに活かしながら時代に先がけるまちづくり

かつて「夜逃げの町」とまでいわれた過疎の町は、先駆的な自然保護活動と有機農法により、国内はもちろん、海外からも熱い視線を浴びる存在となった。宮崎県の中心に位置する、人口七〇〇〇人余りの綾町は、数々の新たな取り組みを経た今、未来へとその宝を残そうとしている。

取材・文 山内文子　写真 野瀬勝一

綾川渓谷から仰ぎ見る「綾照葉大吊橋」
（長さ 250m、水面からの高さ 142m）

上／綾町への旅は、宮崎空港からバスを乗り継ぎ約90分、JR宮崎駅からはバスで約1時間。下／町をぐるりと囲む山々の森林は、町の面積全体の80%を占める。

「夜逃げの町」から、健やかな有機農法の町へ

食の安全、安心。各種メディアをはじめ、最近、巷で声高に語られることが多いテーマだ。ことに二〇一一年の震災以降、自分の家族や暮らしをあらためて考える人々が増え、生命の根幹となる食の在り方が見直されつつある。

有機農法や在来種の栽培をはじめ、自然に根づいた農業もあらためて脚光を浴びているが、昭和五十年代から既に、その取り組みに深く携わっていた町があった。宮崎県綾町。県の中央部、宮崎市から車で三〇分ほどの距離に位置する、人口約七〇〇〇人の町だ。

要となる産業は、農業。五〇〇戸ほどの農家のうち、七割以上が「自然生態系農法」と呼ばれる、化学肥料や農薬を使わない農業を営む。これは、全国的に見てもトップクラスの数字だ。

現在でもなお、周囲との関係や経営を考えたときに、有機栽培を始めようとする農家の前には高いハードルがそびえる。ましてや、大量生産が是とされた昭和の時代に、なぜ、どのようにして、綾町は世間とは異なる道を歩んできたのか。当時、農協の組合長だった、前田穣町長に話を伺ってみた。

転機は、町長が七八年に三二歳で農協の常勤組合長となった後に訪れたという。郷田實前町長から、有機農業のまちづくりをしたいとの提案があったのだ。

「正直なところ、現実と理想のはざまで苦労しました。農薬も除草剤もできるだけ使わない。安全なものをつくるとなれば、品質は整わない。市場流通に乗らないわけです。農協の経営は大丈夫なのか、組合員の生活は守れるのか。そういうジレンマはありました」

農協の組合長として、前田氏は肥料や農薬の販売に努めなければならない役割を担っていた。一方で、生活が成り立たずに次々と集団就職で町を後にする仲間を見送りながら、「地元に残らせてもらっている者として、いいまちづくり、郷土づくりをしていかないと」との思いは以前から募っていたとも。

1990年の就任以来、町長を務めて6期目を数える前田穣氏。「まちづくりは人づくり、の理念のもと、文教の町を未来に向かって目指したい」と話す。

かつて綾町の主要産業は林業だったが、森林資源の減少や機械化の流れに押されて山の仕事は急減。国の大規模な公共事業が終了した昭和三十年代、町の人口は五年で二五〇〇人以上減少し、一家離散や夜逃げが日常茶飯時となった。切なくも「夜逃げの町」と揶揄されるほど、その頃の町の経済は瀕死の状態にあった。地域の活性化のために青年団の活動など積極的に町とかかわってきた前田氏は、有機農法で生き残れるならという望みをかけて、郷田前町長への協力を決意する。

「健全な土壌づくりに取り組み

新鮮な野菜をはじめ地元の人が手がけた多様な品々が並ぶ「綾手づくりほんものセンター」は、2013年に25周年を迎えた。

ながらも難儀したのは、価値あるものを、いかに消費者に届けるかという流通の体制です。まず地元の青空市場での地産地消から始め、その後県内にアンテナショップを設けるなどして、販売流通体制を一生懸命整備しました」

ちょうどその頃、食の安全に着目した生協が誕生するという巡り合わせもあり、「綾の野菜はおいしい」という評判が少しずつ広がっていく。

青空市場として生まれた販売所は、八九年には「綾手づくりほんものセンター」という委託販売の商業施設に。各地で続々と建設されている、道の駅の先駆けだ。今でも早朝から、取れたての新鮮な野菜を手にした農家が集まり、それを目当てに宮崎市からわざわざ買いに来る人も少なくない。昼過ぎともなれば、多くの商品が売り切れてしまう繁盛ぶりだ。

実際、綾町の野菜を口にしたときの瑞々しいきゅうりのしゃきっとした食感や、かぼちゃや人参といった根菜の甘味が印象深い記憶を残している。噛めば噛むほど風味がふくらみ、お代わりを重ねた米の旨さもまた然り。健やかな美味を日常的に口にしている地元の人たちを、心から羨ましく思ってしまう。

とはいえ、理想やおいしさが、農家の意識を変えたわけではない。郷田前町長は、単なる旗振りだけではなく実質的なサポートで農協や農家の歩みを促した。その手段は、助成金だ。

三代続けてタバコ農家を営んできた、松井農園の松井道生氏は当時を振り返る。

自ら農業に携わるようになってから、松井氏は過度にも思える農薬や化学肥料の使用に疑問を抱いていたものの、生活を考えれば、転換にはなかなか踏み切れずにいた。ところが、化学肥料に替えて堆肥を使えば、一反あたり一万円程度の助成金が出るという。さらには、堆肥を撹拌して散布する機械にも補助がおりると。町の施策は、逡巡していた松井氏や仲間の農家の背中を押した。

「次第に土づくりが整いました。つくるものもどんどん健やかになってきたんです。その結果、県外からも野菜を欲しいというお客さんが来だした」

松井氏の場合は、幸いなことに全国区の展開を図っていた居酒屋チェーンとの縁が生まれ、需要がいっきに高まっていく。

「東京の人は責任を負ってくれるわけではない。基盤は残しておかなければ」という父親の言葉を胸に、タバコの葉の栽培はしばらく続けていたが、現在ではすべて有機農法の野菜づくりにシフト。「松井さんとこの野菜なら食べられる」そんな消費者からの声も、継続の励みになった。

これからの課題のひとつとして松井氏は、JAS有機（注1）の取得をあげる。有機農法を町の看板に掲げながらも、綾町でJAS有機を取得した農家はまだまだ少ない。膨大な数の書類が、道を阻むのだ。

それでも、綾町は恵まれた方だと。行政のサポートのおかげで、他の自治体よりも、登録の料金がはるかに低く抑えられているからだ。

「行政、農家。一方だけに負担があったら、取り組みは続かないと思っているんです」

その言葉通り、行政と農家が互いにタッグを組めたからこそ、綾の健やかな野菜は日の目を見ることができたのだろう。

収穫したてのとびきり新鮮な有機野菜の料理（綾・早川農苑）

（注1）JAS規格（日本農林規格）に適合した生産が行われていることを登録認定機関が検査・認証する制度。

松井道生氏が営む松井農園の野菜は、柿を彷彿させる人参をはじめ、まるでフルーツのような風味があり、訪れた人たちが感動を覚えるという。

照葉樹林の豊かな自然が生んだ経済効果

そんな綾の豊かな大地を支えているのは、町の周囲に茂る照葉樹林だ。有機農法へと郷田前町長の心を動かしたのは、実はこの木々が茂る山の景色だった。

郷田氏が町長に就任した直後の六七年、国から自然林伐採の命が舞い込む。地元の人にしてみれば、願ってもない雇用の機会。しかし、郷田前町長は徹底して抗った。束の間、町が潤うことよりも、自然を守る道を選んだのだ。

その後、照葉樹林の山間に、観光資源としての吊橋をかけることを企画。地元の人にしてみれば、どこにでもある見慣れた雑山に過ぎず、馬鹿げたアイデアだと笑う人もいたそうだ。ところが、完成した吊橋は当時としては世界一の規模だったこともあり、一躍話題に。二代目の吊橋となった現在でも国内外から年間一五万人もの観光客が訪れるという。

高さ一四二メートル、長さ二五〇メートル。眼下を行く川の流れをともなった、ダイナミックな景観は圧巻。足がすくむほどのスリルを味わいながら、郷田前町長の先見の明を感慨深く思う。

前町長が守った綾町の豊かな自然はやがて、企業誘致にもつながった。八五年、そば焼酎「雲海」で知られる雲海酒造の工場建設だ。八九年には「酒泉の杜」としてレストランや宿泊施設もあるテーマパーク的な施設へと昇華。試飲や蔵見学の楽しみに加え、「酒泉の杜」でしか購入できない銘柄を用意していることもあり、年間六〇万人以上もの来場者があるそうだ。

焼酎のもと、発酵中のもろみを撹拌するかい入れ作業を行う「雲海酒造」綾工場長の福田清治氏いわく「綾町の農作物や畜産物は品質がほんとうにいいので、われわれも負けてはいられない」

綾工場長の福田清治さんは、この地の魅力として名水百選にも選ばれた水をあげる。やわらかながら程良くミネラル分をふくんだふくよかな味わいが、旨い焼酎造りを支えている。

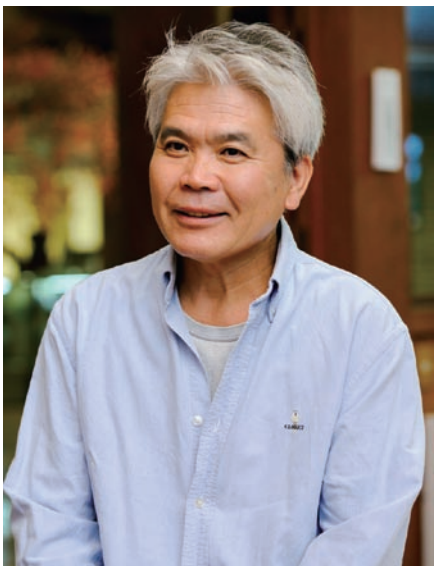
試しにと他所の水で仕込んだ焼酎と合わせてブラインドテストをしたところ、参加者は皆、綾町の水から生まれた焼酎を選んだとか。

「おいしい水で、おいしい焼酎ができるのを実感しました。その分、焼酎を造る際に出る廃水は通常の基準よりも厳しい数値まで落とすことをはじめ、絶対にこの自然を壊さないよう町と協定を締結しています」

自然がもたらす恵みを巧みに活かした、綾の町づくりにはさらなる柱がある。そのひとつが手作り工芸の振興だ。

「PRや制作活動において、行政からはほかの町に負けないくらい全面的に協力してもらっています」

そう話すのは、地元出身の陶芸



自ら立ち上げた「元町(もとまち)陶苑」で制作に励みつつ、まちづくりにも積極的にかかわる陶芸家の日高幸一氏。

上／700年ほど前の山城を復元した「綾城」。「綾・国際クラフトの城」が隣接。左／町を訪れた人のために、各種店舗や施設で特典が受けられる「綾の旅札」を1000円で販売。

家、日高幸一氏。金銭面で直接的にというわけではなく、側面からのサポート。それが、「綾・国際クラフトの城」だ。陶器、ガラス製品、木工家具、染織といった工芸家による匠の技の作品が展示され、購入もできる。観光施設としても人気は高い。

町民ひとりひとりの自治の心を育む取り組み

ものづくりは、一般の住民の心にも励みをもたらした。それを支えるのが、「自治公民館制度」という綾独自の仕組みだ。全二二の集落それぞれに自治公民館が設けられ、住民は協力しながら地域の活性化を考えていく。

工芸品や料理といった自分たちのつくった品々を発表する、地域ごとの文化祭の開催もその一環。工夫を凝らしたもてなしで、イベントは賑わう。絆を培う場は地域の子どもたちを育み、年配者の生涯学習の場にもなる。日高氏は館長を務める傍ら、器づくりの楽しさを住民に伝えている。

有機農業に見られるように、行政は最初の扉を開く。しかし、その後はあくまでも住民の力によって開拓されねばならないというのが、この町の哲学だ。自治とは、町民ひとりひとりが自らを治める意識をもつことだと。

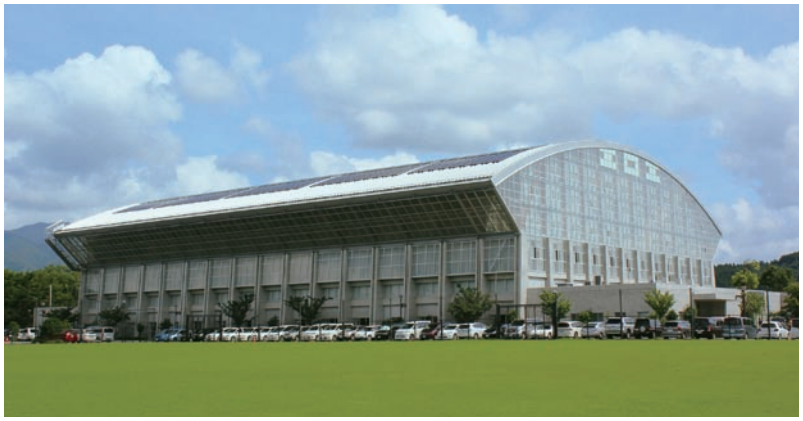
「住民の皆さんがイニシアチブをとっていただけるようになれば、行政経費はどんどん安くなる」

そう話す前田町長は、市町村合併にも与せず、人口約七〇〇〇人の町の規模を守ってきた。町民の顔が見えて声が届く、この範囲が適正だという。加えて、前町長がまいた種を、時代の流れの中で、いかに発展させていくかが、前田町長の課題となった。

そして手がけたのは、箱物の建築。箱物といえば、全国的に税金の無駄遣いの象徴ではないか。見かけは立派ながら利用者がなく、空洞化している例は数えればきりがない。しかも案内された綾町の体育館は、バレーボールのコートが8面設けられる大きさだった。

それだけではない。美しい天然芝の野球場やサッカー場も設けられている。人口が一万人に満たない自治体において、必要な施設なのだろうか。そんな疑念が胸をよ

4800㎡という国内最大級の床面積を誇る体育館「綾てるはドーム」は、地元産の杉材を使用した木造建築。シンプルなデザインと相まって目にやさしい。



ぎる。事実、建設当時は、反対の声もあがったという。

「中途半端な施設だったら、利用は少ない。どうせやるなら、一流の人材が求めるような、グレードの高い施設を整備しようと」（前田町長）

果たして、体育館は年間一〇万人以上もの利用者が訪れる。サッカーグラウンドは、ガンバ大阪や川崎フロンターレをはじめ、Jリーグのチームの合宿等にも使われるように。選手のみならず、ファンもまた綾町に滞在する、二重の経済効果を生み出した。

福冨博之氏と田んぼに囲まれたカフェ「Fukutomi Farm Garden Aya」。米粉のパンはもちもちっとした独特の食感とともに、あとを引く旨さがある。

若い世代が挑む あらたなる農の展開

すべてが順風満帆に思える景色。とはいえ、現在、町の経済の礎でもある有機農法は、決して珍しい話ではない。時代は確実に、綾町に追いつきつつある。市場が広がると同時に、ライバルも増えてきた。

そんな状況のなか、新たな道を自ら切り拓いたのは、米粉のパンの販売とカフェを営む「Fukutomi Farm Garden Aya」の福冨博之氏だ。合鴨農法（注2）による無農薬の米作りに励む農家の長男として生まれた福冨氏は、年々減る米の消費量に危惧を覚え、加工販売に活路を見いだそうとした。

粉の配合からはじまり、すべてが初めての体験。寝る間を惜しみ、一年もの歳月をかけて試行錯誤を重ねて完成させたパンは、一〇年に宮崎日日新聞農業技術賞を受賞。メディアにも取り上げられて人気を呼んだ。その後、田んぼの真ん中にスタイリッシュなカフェをオープン。県外からも客が訪れるほど、話題を集めている。一次産業の米作りから加工・販売の二次、三次産業までとり込んだ六次産業の成功例として、福冨氏は講演に呼ばれる機会も増えた。

「若手の後継者を育てていくためには、夢物語を語ってもだめ。魅力のある産業にしないと」

町の発展のためという大義名分のほか、いい生活ができる、いい車に乗れるというのが若手農業者の励みになると言いながらも、福冨氏は照れくさそうに笑った。

「この町が好きですし、先輩たちがつくり上げてきた有機の町を継承していきたい」

綾の町が好き。滞在中、幾度となく聞いた言葉だ。漫然と暮らすのではなく、町をきちんと思いながら自分たちもなにかをしたいと考えている人の多さに、正直なところ驚かされた。

本格的な乗馬クラブ「綾馬事公苑」には首都圏からの利用者も多く、十一月の「綾競馬」は二万人もの来場が。十月開催の「綾・照葉樹林マラソン」も人気が高い。

世界が注目する 綾町の暮らし

さらには一二年、大いなる朗報が届く。綾の照葉樹林が「ユネスコ エコパーク（注3）」に登録されたのだ。日本での登録は三二年ぶり。照葉樹林として日本でもっとも広い面積を有し、日本の固有種が多々見られるほか、自然と共生するまちづくりの実績などが評価されてのことだ。

役場の照葉樹林文化推進専門監

（注2）アイガモを利用した減農薬もしくは無農薬農法。

（注3）ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）が1971年に発足させた「人間と生物圏計画」に基づいて成立した国際的な指定保護区「生物圏保護区」のこと。日本では2010年からユネスコ了解のもと「ユネスコ エコパーク」の愛称を使用している。

「ユネスコ エコパーク」に登録された照葉樹林は、ニホンザルやニホンカモシカも生息しているとか。３月中旬～下旬にかけては、淡いピンクのヤマザクラが豊かな緑の景色に奥ゆかしく彩りを添える。

として、三〇年間にわたりリサーチに携わってきた河野耕三氏によれば、今回の登録がユニークなのは、単に自然だけを守ってきた結果ではない点にあるとのこと。ほかの地域は、エコパークの登録を地域の活性化につなげる目論みを秘めるが、綾の場合は流れが違うとも。

「綾町は有機農法をはじめ、自然をベースにした町づくりを行ってきました。大吊橋で訪問客に照葉樹林の大パノラマを体感してもらう仕組みをつくり、地下水を利用して「酒泉の杜」が生まれた。環境に負荷を与えずに、自然生態系からの恵みを最大限利用し、さらにはスポーツ施設なども生まれている」

ほかにあまり例を見ない自然環境をともなったまちづくりは、国内のみならず海外の関心も引き、視察に訪れる人が急増した。対応が大変だと嬉しい悲鳴をあげる河野氏は、実は綾町の住民ではない。それだけに、客観的な視点でこう語ってくれた。

「これまで照葉樹林の保護を進めてきたのは、一部の町民と外部の人間です。ところがエコパークに登録されてから、地元全体で盛り上げなければ、という意識が出てきたんです。自分たちこそ主役だという思い。今こそ、町民の心の部分からのステップアップをはかる機会ですよ」

青い鳥は、自分の近くにいるが、それに気づくのはなかなか難しい。しかし、世界が認めてくれたのだ。登録のニュースが広まったときの、地元の人たちの誇らしげな笑顔が目に浮かぶようだ。

ほかにも移住者や出生数、商工会青年部のメンバーが増えているなど、綾町の好調はあれやこれやの数字が物語るが、なかでも前田町長の表情が喜びにあふれた瞬間が忘れがたい。

「ふるさと納税が、全国でもベスト10に入るぐらいなんです。宮崎県よりも多い」

金額の云々ではない。たとえ遠くにいても、綾町を思う人が多い確かな証し。郷田前町長で二四年、前田町長で二四年。行政のトップがころころと変わらず、半世紀近くこつこつと地道に積み重ねてきた努力が、花開いたのだ。

親の背中を見て、子は育つ。町を愛し、誇りに思う心は確実に未来に継がれていくのではないか。周囲に流されることなく、自立した道を歩んできたこの町に生まれた子どもたちは、一〇年後、二〇年後にまた、豊かで自由な発想をもとに、道を切り拓くに違いない。

郷田前町長の時代から長きにわたり、綾の照葉樹林を見守ってきた河野耕三氏。

照葉樹林をモチーフにした町のイメージキャラクター「もりりん」はイベント等にも登場。

「綾照葉大吊橋」の先には遊歩道が設けられ、照葉樹林が生む清々しい緑の香りを心ゆくまで満喫できる。